

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

# ふるさと 風

第141号（2018年2月）

風に吹かれて（118）

白井啓治

・寒さ厳しき程に春隣と雀らのいう

ヒトの寿命は本来五十五歳という記事が出ていた。人間五十五歳を過ぎると癌で死ぬ人が急増するという。それは細胞分裂時にDNAの複製にエラーが生じるからだという。人体にはエラーを防ぐ様々な仕組みや、癌化した細胞を排除する免疫システムが備わっているのだが、年齢を重ねるにつれてエラーの確率が高まり、免疫系は衰えてくる。そのため癌を防ぎきれなくなるのだという。

人間歳をとると全員が癌によって亡くなるのかというところという訳ではないが、健康・健全年齢というのは五十五歳程度だという。成る程、そうしてみると還暦というのは人間の一つのサイクルが終わったということになるようだ。しかし、還暦の漢字のように再び新たな肉体に還るというのではなく、むしろ暦が終わったのだから後は儲けものということのようだ。

今年七十四歳というのは、もう十四年も余分を貰っているということだ。これから後何年の余分が得られるのかは分からないが、一年一年を、いや一日一日を大事に、というか愉快に過ごさねば罰が当たろうというものだ。

地球の自転周期は絶えず変化しているのだそう。何でも今は、数千分の一秒の単位ではあるが遅い速度で自転しているのだという。この自転速度が数年にわたって遅れると赤道が縮み、それに伴ってプレートが押しあい地震を起こすのだという。これは何とも聞き捨てならぬこと。

そう言えばこのところ世界の各所に地震が発生しているが、それもこの地球の自転速度に影響されてのことなのだろうか。もしかしたら誰かの予言する人類滅亡の時が近づいているのかもしれない。

最近の火山活動の活発化もしかしたら自転速度の遅れによる赤道の縮み現象に起因しているのだろうか。因果関係は良く解らないが、素人考えからすると無関係には思えない。国の危機管理委員会などはこうした情報をどう捉えているのだろうか、気になるところではある。

北朝鮮の核開発にばかり気を取られていると、足元の大地震による原発事故によって原爆攻撃以上の大災害になるだろうと思うのだが、原発問題での前向きな議論がされることはない。野党の原発廃止も単なる政争の道具としての一議題にしかなっていない。実際に廃炉とした時の、処理費用を考えたら、政争の道具にしておくだけの方が現実論だからであろう。

今、地球の自転周期が遅れ、赤道が縮んできているそうだよ、なんて情報があっても私欲・我欲に右往左往していて、ビットコインで大損したなどと大騒ぎしている。人の世を作っているのは金だとか考えていないようである。いや、それ以上の上のことは考えられないだろう。地球規模での大災害があっても、金があればなんとかなるとでも思っているのだろうか。彼らにはおそらく選挙資金集めの方が重大事なのであろう。

狩をすることも百姓をすることも忘れてしまった現代人に、若しかしたら天は鉄槌を下そうとしているのかもしれない。

昨年秋より、相撲協会の話しでテレビのワイドショーや週刊誌が盛り上がっている。相撲ファンと自認する人達が色々なことを言っている。中でも横綱白鳳の相撲の品格問題がよくよく傑作である。皆で寄ってたかって白鳳叩きをしているに見える。ルール上違反でないのならば、かちあげ、張手を使っても問題ないであろうに。それに物申すならば、横綱との対戦はアームレスリングのようにすればいいだろう。行司の監視のもとに、がつぶり四つになって試合開始にすればいいだろうにと思う。

それでは格闘技としての立ち合いの妙味がないというのであれば、品格などと言わないが良いだろう。今回の暴力問題から、相撲道、角道などと相撲の歴史認識について言われ始めている。歴史認識だから、歴史ではなく歴史に名を借りての都合の良い理屈である。相撲の品格とは、スポーツ界に蔓延している意味不明の「根性」と同じだと思っただが。実に、認識という言葉の便利なことか。

広辞苑によれば、「寛容」とは、①寛大で良く人を許し、受け入れる事。咎とがめだてしない事。②他人の罪過を厳しく責めない事。③異端的な少数意見発表の自由を認め、そうした意見の人を、差別待遇しない事…とある。

なるほど「寛容」の精神が満ちていれば、この世から諍いは少なくなる。それが逆だから争いが絶えない。ミャンマーの民族浄化問題は、スーチーさんでも、どうにもならないのか。62万人のロヒンギャ難民をどうするつもりなのか。寒さと餓えで震えている人々を、国連などその救済に何の役にも立っていない。

今時、北朝鮮の狂気を何とかできないのか。もし日本が電磁パルス攻撃を食らったら、電気・ガス・水道、ラジオ・テレビ・スマホ、道路・鉄道・航空機悉く壊滅状態という。原発狙いも最悪だ。そんなお隣さんからどうやって我が国土を守るか。何しろ北の政府自身が偽札を印刷し、麻薬を製造し、近辺漁場は中国に売り、やむなく日本領海で密猟して来いと政府の命令とか。碌なエンジンもなしに木造小舟で遠距離操業。嵐で難破、日本へ漂着（16年69艘、17年104艘。あんなロケットマン一人だけがブクブク太って国民は栄養失調。餓死者続出。同じ朝鮮民族同士で60年余も睨み合い。元を糾せば米ソの代理戦争のようなもの。主義主張は違うだろうが、同一民族として譲り合い、仲良くできないのか。

さて現実の人類は、どんな状況にあるか？人類は「万物の霊長」とか、神様に近い尊厳なる存在…とか、よくぞ買ひ被って、平気で特別扱いしたがる。しかし人類の実際の行動を見れば、

そんな高貴な、神様の課長補佐みたいな存在とは、およそかけ離れた感じがする。偶に救世主が現れ、後世の人々が神と祀り上げて、すぐ派閥争いなどする。古今東西、これまでの人類の歴史を振り返ってみて、戦争のなかった時代など有ったろうか？

\*

しかし人類は太古から「戦」ばかりしていたわけではなさそう。人類発祥の地アフリカで、急激な気候変動により、樹木が減少してサバンナ化し、森林生活をしていた人類の祖先は、やむなく地上に降りざるを得なかった。

しかし地上には、ネコ科の大形肉食獣がワンサという。新客は足が速いわけでもなし。角や牙や鉤爪（かぎづめ）などの生来の武器を持つているわけでもない。絶好の獲物が舞い降りてきたお陰で、肉食獣は腹を満たしたに違いない。

とすれば、祖先達は仲間同士で、ケンカに明け暮れしている場合ではなからう。むしろ手を取り合って、いかに身の安全を図るかに専心する他なからう。短い脚で立ちあがり、背伸びして敵を早く発見し、仲間には危険信号を送り、早々に逃げるしか方法はなかったに違いない。そうして生き残った者のみが子孫を残せた。直立二足歩行で、より高い視点から、より遠くを見つめる懸念の習慣が、身長を伸ばし、足の長さを増した。即ちより足の長い体形への憧れが、深層心理として今日まで影響している。

以来、狩猟採集時代の700万年間、徐々に石器や言葉が発達して、遂に今から1万年ほど前、メソポタミアあたりで狩猟採集の遊走生活から、農耕牧畜の定住生活が始まるまで、獲物を分け合って暮らす共同生活の、いわば互助会的生活で

あったと思われる。

罅（ぬぐら）定めぬ遊走時代は、人口も少なく、ケンカなどするより、互いに連携して狩猟採集したほうが効率的であつたろう。ところが農耕牧畜の定住生活が始まると、自然に権力を持つ者と持たざる者との格差が生じ、食糧の分け前を、独占しようとする「ずる賢い」権力者が生じてくる。当然、働いただけ分け前を貰えないグループもできてくる。両者に争いが生じ、この頃から、人類に醜い争いが定着してくる。

即ち人類は発祥したアフリカ時代からではなく、文明が進み農耕牧畜が定着した頃から、権力争いが始まったと考えられる。武器が改良され、一部の者に権力が集中し、規模が大きくなれば、村落同士、遂には国家同士の戦いが常在化していったものと思われる。

人類は近々わずか1万年ほどで、醜い本能丸出しの野生動物にも劣る好戦的な生物に変化してしまった。同じ大型類人猿の中で、オランウータン、ゴリラ、ボノボは極めて温厚な性格であり、チンパンジーと人類だけが、仲間同士殺し合いをする獰猛な性格の動物へと進化した。

特に人類は、愚かにも闘いの武器を強化発展させ、大量殺戮という誠に悍（おぞ）ましい方向へと進んでいった。文明進化＝武器の進化。どんなに文明が栄えようが科学が進歩しようが、武器の効率化、大量殺戮する方向へまっしぐらに進んだ醜い生物集団。これが人類だ。

自虐的に人類の裏面ばかり強調しても始まらないが、21世紀を迎えてもなおかつ世界の至る所で闘いが止まないところを見ると、人類とは神聖で、温厚な生物とは到底言えそうにもない。

\*

具体的な例を見てみよう。最たるものは「核兵器」だ。湯川秀樹もアインシュタインも、軍の要請でその開発に参画させられたという。これほどの偉大な科学者達を極悪の道へ誘い込む「軍部」とは、とんでもない恐ろしい組織だ。

いま世界の核兵器保有状況は(2017年1月ストックホルム国際平和研究所発表、オバマ前米国大統領の核兵器削減活動が奏功し、米国7000発、イギリス215、フランス300、ロシア6800、中国270、インド1200、130、パキスタン130、140、イスラエル80、北朝鮮20)合計14,935発となり、米露の削減は進んだが、中国・北朝鮮だけが増産。

何の為に文明は進化するのか？ 全人類が仲良く、平和に暮らしたいがために、諸々創意工夫を重ね、合理性を追求し、平等に自然の恵みを共有する…そのために世界は努力してきたのではないのか。ところが文明が進めば進むほど、資源が枯渇し、戦略兵器のみが突出して規模拡大し、大量破壊兵器が氾濫し、人類の将来に暗雲を投げかける始末となった。

要するに人類の根本心理には、他人の物をかすめ取る…という基本心理が根付いている…としか思えない。国民の納めた税金を、あれやこれやと理屈をつけ、特定の者に補助金…など、酷いものだ。世界中いづこも、権力者にこびりつき、役職の地位を上げ、横領、収賄など、懐を膨らませようとする輩が、至る所に氾濫している。何とも醜い根性だ。

コロンプス以降のヨーロッパ白人共が、南北米大陸の先住民9000万人の9割を殺害し、その土地や財産を奪った。アメリカの歴史を見ると、更にアフリカから黒人を拉致し、奴隷として、国

土開発を進めた。リンカーンは奴隷解放を宣言したら、たちまち暗殺されてしまった。このような人類の行為のどこに、「神聖」さを見ることができませんか？ 真の人類の進化に虐行する大脳進化を嫌うから、私は膨らみ過ぎた人類の大脳を「毒饅頭」と名付けている。

\*

話を原点に戻し、人類にもう少し寛容の精神があるなら、小さな揉め事に一々腹を立てずに、大きく許し、みんな仲良く暮らしていけるのではないか。戦いに巨大なエネルギーを失うアホらしさは誰でも簡単に理解できるはず。全世界が軍事費に余計な予算を使わず、教育や文化、医療福祉などに金を回せば、どれだけ世の中が穏やかに好転する事やら…。

菅原もこんな甘言ばかり言い続けるようでは、ついに認知症もかなり進んでいる…と仰るかもしれないが、今更、いい子ぶって世間から褒められようとは思わない。老犬の遠吠えと嗤われてもかまわない。単細胞の直球勝負。生来のゴクラクトンボで結構でござる。

さて、国連とは一体どれだけの力があるのだろうか。すぐ『○○に対し非難決議』などと報道されるが、それが一体何だというの？ 何の進展も見られない。ずる賢いならず者は、非難決議など平気のヘイツチャラ。己の利益のためなら、国際法も仁道もあつたもんじゃやない。まるで早い者勝ち。中国の南シナ海での岩礁埋め立て軍事基地化を見れば明々白々。こんなのは、国連が巨大な軍事力を持ち、簡単に押し潰すくらいのパワーを持って正常化に歩を進めてほしい。

とにかくいかなる国も軍備は持たない。但し国連軍だけは、文民統制下に強大な兵力を持ち、世

界のどこかに無謀な野望が芽を出したなら、小粒の中に捻りつぶす。全世界で196もの独立国家がひしめくから争いが絶えない。ナンセンスな国境線など取っ払え！ 世界は一つ。折角人類は大脳を膨らましたのだから、それぐらいの知恵を働かしてよさそうなのだ。渡り鳥から見たら、国境線など、アホの極み。

いま世界中に同時多発しているイザコザは、いずれも、○○第一主義の、「寛容の定義」を無視した、自分さえ良ければそれでよいとする、無謀な輩の独善主義だ。トランプ大統領は、地球温暖化はデッチアゲの偽科学だと息巻くあの態度には開いた口が塞がらない。自分に票を投じてくれる炭鉱労働者の失職が困るので、全世界が真剣に取り組む温暖化防止の協定に真っ向から反対する。よくぞあれだけ「愚か者」に徹する事ができるものだ、ホトホト呆れる。

百年先、千年先どころではない。わずか30年先も読めない、集票だけしか頭がない独善主義者を、大国の元首に選ぶアメリカ人とは、一体何を考えているのか。温暖化により中緯度のアメリカでさえ、マラリアやエボラ出血熱など熱帯病の巣窟となる事が分ならず、どうやって国民の将来の安全性を確保するつもりなのか。

\*

エルサレムの首都認定など、それが何だというの？ 3つの宗教が聖地と認めているならそれはそれでいいではないか。かえって世界がまとまる絶好のお膳立てではないのか。なぜもつと大きな目で、物事を見る事ができないのか。宗教を生み出した理由は、本来どんな宗教でも民心の安寧を願った心よりどころではなかったのか。なぜに他の宗教と相いれることができないのか。自分

だけが正しくて、他は邪教だとする考えは、狭量すぎる。寛容が足りない。単なる排他的独善主義ではないのか。

私は中米で、アメリカのキリスト教原理主義者500人くらいの比較的穏健な集団の生活を見てきた。10km四方くらいの土地をバリエードで囲い、他国内に自分達の独立国を囲い込むような存在。食糧は殆ど自給自足。絵画や彫刻売却などで生計を立てる。大きな川から運河で水を引き、魚を養殖する巨大な溜池。その水を浄化して飲料水や農業用水。更に落差を造り水力発電所。放送局・教会・学校・農場・鉄工場等すべて自前。地動説や進化論など、それも一つの考えに過ぎない……とする。あくまでも基本はバイブル。人類は神様が造ったとする。どの宗教にも原理主義者はいるもの。イスラム国は過激すぎ、自ら滅亡しつつあるが、米国内のキリスト教原理主義者達は、人類はサルから進化したなどと学校で教えた教師を、今でも簡単に暗殺している。そして進化論を教える事を禁じている州はいくつもある。どうしてこんな国から、ノーベル賞科学者が続出すのか、真に不思議。

\*

人類はどうしてこんな方向に進化したのか？

私の推測では、以前にも書いたが、遺伝学用語の「ポトルネック効果」とする他ないように感じる。即ち、我らの祖先がアフリカからアラビア半島へ進出した7万年前、やっと人口が増え始めた頃、インドネシアのトバ山が巨大噴火。その為に太陽光が地上に十分届かず、地球は冷却化。多くの動植物が死滅。その際人類の祖先も10分の1くらいに激減した。勿論多数の人口があれば性格も多様にあり、温厚派、中間派、過激派が入り混

じって存在する。しかし人口が激減する事件に遭遇すれば、結局過激派が他を押しつけ、まず自分だけは何としても生き残ろうとする。強欲な者のみが生き残り、子孫を残す事となる。即ち利己的な遺伝子群が集中して今日の我ら子孫に集約する事となった。温厚で利他的な遺伝子を多く持った人々は、生存競争に打ち勝てず、社会から消えていった。それが末永く尾を引き、今日のような競争主義・独善主義。ひいては、所により独裁国家へと発展していったものと考ええる。生物集団が急激に数を減らした時、特定の遺伝子が濃厚に子孫に集約する。これが、ポトルネック効果の恐ろしさだ。

スポーツでも特に格闘技は違反すれすれの汚い手を駆使しても、勝たねば何にもならないとして、品格のない醜い手を多用する。大相撲なんか国技として、武士道になかった紳士的な面を強要されるが、外国から来た横綱が立ち合いを逃げたり、張り手・カチあげ・ダメ押し等、いくら注意されても、やめない。審判に抗議したり、己の40回優勝を讃え、観衆に万歳3勝要求。即ち審判部や協会がナメられている。強欲そのもの。それゆえ純国産・19年ぶりの「稀勢の里」の横綱昇進を喜ぶファンが圧倒的に多い。

\*

大分話がそれってしまったが、人類から薄れていった「寛容」の精神を取り戻す事により、もう少し世の中が良くなるはずだ。あんまり突つ張りすぎて世の中がギスギスし過ぎては、この世に生まれた喜びも半減してしまう。政治も経済も、バランスよく、互恵的に繁栄するよう、国の指導者は、猛省を要する。〇〇第一主義は、小学生でも軽蔑する超下等な発想である。

限られた資源や面積で生活するのだから、互いに譲り合い、大きな心で包みあい、穏健な生活をしたものだ。特に近隣同士が、隙あらば奪い取ろうとする姑息な精神は、国家を運営する指導者は、絶対に排除すべき事項である。

茨城県は長年「魅力度」全国最下位。その要因に車の運転マナーの悪さが指摘されている。例えば信号のないT字路で先頭車が右折信号を出して止まっている。後続車も多数。対向車は、ほんの数秒車を止めて、右折をさせてやれば、全体がスムーズに流れる。CO<sub>2</sub>も余計に排出しなくて済む。相手も感謝のパッシング合図。こちらも気持ちが良い。こんなささやかな事でも実行を重ねていけば不名誉な記録は消せる。

現在の地球は未来の子孫からの預かりもの……という概念をすっかり頭に刻み、子孫が住みよい環境を残すべきである。今の今、自分だけが良ければそれでよいとする超未熟な考えを捨て、互いに譲り合って、相手を尊敬し、自らも多少の不便は我慢して、棲みよい環境を整えていきたいものである。未来の子孫から、21世紀の先祖達がよくぞ気が付いてくれた……と言われるよう大きく方向転換を図るべきである。互いに譲り合い、平和に満ちた世界の到来を切に望む。

## 地域に眠る埋もれた歴史(35) 木村進

### 常陸国分僧寺跡・国分尼寺跡(2)

石岡駅方面から若松町の通りを府中中学校の方へ向かっていくと三叉に別れる交差点がある。国

分尼寺へはこの信号を斜め右へ入った府中小学校の校舎のすぐ裏手にのどかな広い公園として広がっています。



国分寺跡と共に国の特別史跡に登録されています。国分尼寺は、法華滅罪之寺といい、常住の尼僧10名を置き、寺院の財政は、水田10町によつてまかなわれていました。一般に国分尼寺は、国分僧寺より早く衰退したらしく、全国規模で見ても、今日では、その遺跡すらどこにあるのか不明なものがとても多いのです。

常陸国分尼寺跡は、昭和44年から4次にわたる発掘調査により、各建造物基壇の規模や南大門跡、北方建物跡、西及び北を限る溝跡などが明らかにされています。ただ現地には写真にあるように、入口の石碑と金堂などのあつた場所に植えられた二本の桜の古木と案内看板だけです。少し調べていかないとただの広場といった感じです。伽藍配置は他の国分寺や官寺にあるように「南大門」「中

門」「金堂」が南北に一直線に並び、多分その先に「食堂(じきどう)」があつたと考えられています。

また金堂を中心に中門などとの間に回廊があつたのでしよう。現在この回廊部分に当たると推察されるところにレンガで道を敷き詰めてその姿を再現しているようです。しかし当時レンガなどはなく現地を訪れた人はきつときよんとしてしまいかもしれません。私もその一人でした。最初はその意味もわからなかったのです。最近航空写真などが地図ソフトで表示されますので、確認するとやはり違和感があります。トイレの整備などと共に、こんなところも気を付けたいですね。

現在は訪れる人もほとんどなく桜の古木が2つ、春にはきれいな桜の花を咲かせてくれます。国分尼寺のあつた場所は昔尼寺ヶ原(にじがはら)と呼ばれており、地元の小学生アンケートで虹の出る素敵な場所だといわれて先生が地元の歴史をしらないことに嘆いておりましたが、これは虹も素敵だし、尼寺(にじ)も折に触れて話していけばいいのではないかと思います。

私は石岡に越してきた10数年前に、この「にじがはら」という地名を聞いて何の事かわからなかったのですが、それが「尼寺ヶ原」に「にじがはら」とわかつたのはこちらに来て2、3年後だったように思います。

この地域には、後に市街地に移つた清涼寺もありました。清涼寺は今も中町通りにありますが、佐竹氏が入つた時にここが菩提寺になり、秋田へ佐竹氏が移封された時に秋田に移されたのですが、石岡にも残りしました。もちろん京都の清涼寺にある「清涼寺仏」として名高い生きているときのお釈迦さまを彫つたといわれる仏像と同じ型の像があるかどうかは知りません。忍性あたりの影響を

指摘されている清涼寺仏ですから、石岡にもあつたらうれいのですが…。

国分尼寺は光明皇后の強い願いで建立されました。これは「法華滅罪之寺」という正式名称にもあらわれています。滅罪之寺とは光明皇后が、当時兄弟の多くを天然痘で失い、また甥の反乱が起こり、不幸が続いたことに対し、罪(災い)の消滅を願つて立てたことに由来すると言われています。この常陸国分尼寺が何時頃廃れてしまったかについては、調べてもはっきりとしたことはわかりませんでした。平将門がここ府中を攻めて町中が焼かれた時は、ここも焼けたといわれていて、財宝を池に埋めたとか、尼さんもひどい目に合わされたとか、そのような話はたくさんあります。前に「市報いしおかNo.34」に掲載された「黄金伝説」を紹介しましょう。

「国分尼寺跡の付近の尼寺ヶ原(にじがはら)に「ごき洗い」と呼ばれるくぼ地がありました。「ごき」とは、「御器」と書き、「ごき洗い」は、食器などを洗つた池があつたためにそうよばれていたものでした。府中城の大掾氏が佐竹義宣により滅亡に追い込まれた時(1590年)、この国分尼寺も兵火で七堂伽藍焼失してしまいました。国分尼寺では、火の回りがあまりにも早く、全部の物品を持ち出すことができず、大切な仏像、金と銀で作られた調度品や装飾品などを炎の中から運びだし、略奪から逃れるため、全てごき洗いの池に投げ込まれたと伝えられています。しかし、兵火の中で尼僧や寺院の関係者は全員死亡し、ごき洗いの池も焼け落ちた瓦や木材で埋まってしまいました。そのためごき洗いの地中には、黄金が眠っているのだと伝えられています。江戸時代、このごき洗いを掘ろうとした百姓は、崩れ落ちた土の下敷

きになって死んでしまいました。仏罰を恐れた人々はそれ以来誰も掘ろうとはしなかったといわれています。

朝日さす 夕日かがやくごき洗い

黄金千枚 仏千体

尼寺ヶ原にひそかに言い伝えられた歌です。」

とそのまま抜粋しましたが、ここでは戦国末期の1590年の話となっていますね。

それより600年も前の将門記では平将門の国府襲撃(939年)に三千人もいた国府の軍をたつた千人の兵でたたきのめし、国府の役人などはひれ伏して詫び、集めていた財宝(絹など)は皆奪われ、女たちは好きなようにされ、国分寺や尼寺などの寺もほとんどが焼かれたとされています。また、石岡の老舗菓子店「羽鳥屋」さんのお菓子「尼寺のときめき」などには別なお話も載っています。今では秋には萩の花がこのレンガが敷かれた回廊の横で咲きます。後から植えられたものでどのような意味があるかはわかりませんが、萩の花も万葉集にはたくさん歌が詠まれているためでしょう。

○ 秋風の末吹き靡く萩の花

ともにかざさず相か別れむ

西暦758年に大伴家持は因幡守(鳥取県)に任じられて奈良を去ります。別れの席で詠んだ歌だそうです。(友に、秋風に靡(なび) いている萩の花をお互いの髪に挿すこともなく分かれてしまいますね。)

まあ、今ではこの桜の古木あたりから紫峰「筑波」が眺められますから、昔はかなり真近に眺められたのでしょうか。今ではなかなか想像できませんね。

「にじがはら」というとロマンチックに響きますので、これはこれとして楽しめば良いのでは

う。石岡の市街地にある寺もかなり多くがこの尼寺ヶ原(にじがはら)辺りに最初あったが、町を形成するたびに少しずつ移されていったように思われます。

たとえば佐竹氏の菩提寺となった「清涼寺」は1330年頃に尼寺ヶ原に建てられ、1480年頃に現在地に移されました。

また松平家の菩提寺「照光寺」も1374年に鹿の子に建てられ、1590年の大塚氏滅亡の時に寺は焼かれ、佐竹氏の支配となつてから現在の場所に再建されたようです。

最後に全国の国分僧寺と国分尼寺について少し書いておきます。私はあまり全国の国分寺(跡)などは行っていませんが、ここ石岡に来る前には東京の府中近くに住んでいました。また国分寺周辺もかなり中・高生頃には散策する機会もありました。このためこの武蔵国分寺や万葉植物園などは足を運んだこともありです。ただむかしはあまりこれらの跡を大切にしているという様子はあまりなかったように思います。しかしこの国分寺跡の領域がかなり広く北側の国分寺崖線にまで伸びていることが確認され国の史跡の登録範囲を延長して住宅開発を進めないように「市立歴史公園 史跡武蔵国分寺跡」が整備されたのは平成20年であり、また、この国分寺で発掘された瓦や当時の模型などを展示するための「武蔵国分寺跡資料館」が「おたかの道湧水園(日本多邸)内」にできたのは平成21年のことです。また、武蔵国分寺跡が見つかったのは昭和54年です。

国分寺跡などの発掘調査は今も続けられています。こちらの武蔵国分寺は鎌倉時代末期の1333年に起きた新田義貞と鎌倉幕府軍の戦い「分倍河原の戦い」で焼けてしまったといわれています

が、当時の程度が残されていたのでしょうか。ただ、この戦いの後、新田義貞が薬師堂を国分寺の金堂跡に再建し、江戸中期に仁王門などが整備されたそうです。これが今の「武蔵国分寺」で、いわゆる官寺として法灯を受け継ぐものではなく、新田義貞が創建した真言宗の寺院と考えられると思います。

実は仙台には「陸奥国分寺」と「陸奥国分尼寺」が存在しますが、これも陸奥国分寺は伊達正宗が国分寺の昔あった場所はかなり忠実に再建した寺ですし、国分尼寺は昔の法灯を受け継ぐ寺院とも言われていますが、国分尼寺跡の史跡は現在の寺の北側に金堂跡の礎石が、小さく囲まれて残されているだけです。全国68か国の内国分僧寺の跡は推定場所を含め1か所を除いてほぼ判明していませんが、尼寺の方は19か所が全く分かっておらず、確定された場所は30か国です。石岡が国の特別史跡に指定されたところは全国で2か所だけとも言われていますのでかなり発掘が進んだことになりました。特に千葉県市原市の「上総国分尼寺跡」では、中門が奈良時代の工法を使って再現され、「史跡上総国分尼寺跡展示館」を平成5年に建設して一般公開されています。私も行ったことはないのですが、石岡の歴史に係っておられる方々も一度見に行かれたら良いと思います。

## 市指定文化財

兼平智恵子

。雪かき町内笑顔開く

智恵子

新潟県上越市に住む長男夫婦が「上越から来る

と茨城はハワイみたいよ！」

そのハワイも一月二三日は、一面真っ白、町内は三三五五、「ごめんよ、俺！歳だから…」と監督の役目。一致団結。お蔭様で車もあぶなげなく走行。皆様には感謝。お疲れ様でした。午後石岡駅前走行、なんと車道の真ん中に雪を投げている人が…。感謝で一杯の気持ちが怒りにかわってしまつた。

一九四九年（昭和二四）一月二六日、早晩に起こつた衝撃的な出来事、奈良、法隆寺の金堂壁画の焼損を受けて、翌年の一九五〇年（昭和二五）、文化財保護法が制定されました。

価値の高いものが文化財として指定され、そして多くの人に価値が認められたものが文化財指定になっている。古代から栄えた石岡には、先人達が生み出した沢山の文化遺産が残されています。

昨年より、指定制度に基づいて保存されている石岡市の文化財を紹介しております。

国指定文化財、県指定文化財、そして今回からは市指定文化財を紹介してまいります。

#### ○旧千手院山門 有形（建造物）

指定 昭五三・九・十一

旧千手院山門のご案内は、実は当会報三六号でのご案内しておりますがあらためてご紹介いたします。

旧千手院山門は現在の浄瑠璃山国分寺の本堂へ向かう参道に所在しています。

千手院は、弘仁九年（八一八）行基大僧正の法弟、行円上人によって開基され、建長四年（一二五〇）の第一一世、心宥上人が没するまで続いたと伝えられている。

その後の記録はないが天正元年（一五七三）には、京都東寺の禅我大僧正の法弟、朝賀上人によって中興されたといわれている。

近世の千手院は、府中（石岡）における、大寺の一つで、国分寺の東方に隣接し（石岡の地名、三五頁の大正二四年石岡町市街図に掲載されている）、「新編常陸国誌」にも千手院、本寺東寺宝菩提院、朱印地十石、菩提山来高寺と号す。

末寺二ヶ寺、門徒二二寺ありと記されている。

これら千手院の寺院は、その大部分が府中（石岡）の町にあり、人々の信仰を集めたが、明治初年には、そのほとんどが、廃仏毀釈運動や本山の末寺統合策等により、そのほとんどが廃寺となっている。

また、千手院来高寺も大正八年（一九一九）、国分寺と合併して、この質素な趣のある茅葺きの山門が残るのみである。

この残されている旧千手院山門には墓股といわれる部分に、珍しい彫刻が施されています。一見すると見る人を恐怖させるこの情景には、全く逆の意味が隠されています。恐ろしい猿は慈悲深い観音様の化身であり、弱弱しい猿は煩惱に身を焦がした人間の姿を現しているのです。欲におぼれて奈落の底に転げ落ちようとする猿を驚に早変わりした観音様が救い上げるというまさに救済の図で仏教説話が描かれたものだそうです。

茨城県文化財保護審議会員として重責を果たされていた一色史彦先生は、昭和六三年に旧千手院山門の修理工事の監理を依頼され、その一年前にこの恐ろしい情景の彫刻が示している本来の意味を知ったそうです（茨城の古社寺遍路・上 一色史彦著・齋書房出版）。

どうぞ散策の折、境内にお立ち寄りなさつてご観

照のことお薦めいたします。

また、埼玉県熊谷市、妻沼聖天山（めぬまじょうてんざん）歓喜院の国宝本殿に、猿と驚の彫刻が施されている事を最近知りました。是非観照したいと思つていきます。

※参考資料・石岡の歴史と文化

#### 昔学んだ「伝統芸能の話」から 木下明男

##### 軍国主義復活と伝統芸能

3 軍国主義復活の思想的根拠としての西田哲学  
軍国主義復活のための最も重要な思想的根拠となっているものが西田哲学です。「期待される人間像」は、西田哲学一派の中心の一人高坂正顕（芸学芸大学学長が、佐藤政府の方針に基づいて執筆した。佐藤政府は、これを抛り所に教育を反動化し、天皇神話を復活して、軍国主義を全国民に押し付けようとしている）。

西田哲学は、19世紀の初めから40年余りの間に、西田幾多郎（1870～1945）が作り上げた哲学体系の事で、戦前にはヨーロッパ哲学と東洋哲学を統一した日本最初の近代哲学と言われて、大きな権威をもっていた。その西田幾多郎を中心に、京都大学の門下生、高山岩男・高坂正顕・下村寅太郎・西谷啓二、その他が一つのグループを作つて、西田幾多郎の死後も、同じ方向で活動しているのが西田哲学一派と言われるものです。

西田哲学一派は、戦前には、内では絶対主義天皇制を支持して全人民に対するファッショ的な弾圧を基礎づけ、外ではアジア諸民族に対する野蛮

極まる侵略に思想的根拠を与える、重要な役割を果たした。特に太平洋戦争に入ってから、直截軍部の首脳と結びつき、積極的に侵略を助けた。だから、敗戦と同時に、皆戦犯として公職追放をされた。

西田幾多郎は、日本資本主義が帝国主義の段階に入った20世紀の初めから哲学の活動に入り、太平洋戦争で日本が無条件降伏した年に死んでいる。生涯も、活動も日本軍国主義と運命を共にしているが、それはけっして偶然ではなく、西田哲学は日本帝国主義を基礎に、絶対主義天皇制と軍国主義の背景から生まれた哲学です。だから、丁度敗戦で日本軍国主義の根が完全に抜き取られなかったように、西田哲学の反動的な影響も、また後に大きく残った。

1951年、「サンフランシスコ体制」が出来上がると、西田哲学一派は、忽ち追放を解かれ、其々職場に帰って、再び反動的な活動を始めた。

①1956年の「F号ページ」に代表される、教育界から民主主義と民主主義者を追放する活動をずっと続けた。

②戦前の「在郷軍人会」の再組織である各地の「郷友会」が、1955年「郷友連盟」の全国組織に統一されたが、一貫してその思想指導にあたった。大阪で創立大会が開かれたとき「郷友連盟」の最高責任者・服部卓四郎（元陸軍大将・参議院議員）は、態々高山岩男を壇上に招いて、我々の運動はこの先生の思想で指導されていると紹介した。「郷友連盟」は、(一)英霊の顕彰

(二)「君が代」斉唱、国旗掲揚「紀元節」奉祝  
法制化運動(三)民防衛の推進、国防思想の普及(四)道義の高揚、道徳教育の推進、偏向教

育の是正(五)労働運動の正常な発展、我が国産業の安定、これを方針に、それを憲法改悪(天皇元首、再軍備、義務条項強化)に集約して、最も露骨に軍国主義復活を強調してきた団体です。

③労働組合の分裂と右傾化のための努力を続けてきた。「郷友連盟」は、「わが国の美風を抹殺せんとする組織を排撃する」という名で、日教組・国鉄労組などを敵視し、総評と対決する態度をとり、それらのなかに、「職域分会」の名で、「郷友会」の組織を作る努力を続けてきた。1956年宇部の沖の山炭鉱に、1957年徳山の徳山ソーダ、東京の東邦生命、横須賀の運送関係労組の其々に第二組合を作り、1958年国鉄盛岡工場に分会を作ったのを始め、各地の国鉄労組その他に、多くの第二組合を作る。国鉄の盛岡工場に初めて156人の分会を作った時には、機関紙「桜星」は、百万の味方を得たと誇っていた。西田哲学一派は、1957年に「日本労働学院」講座の指導に当たったのを始め、絶えず反共右翼労働運動指導者の育成に努めていた。

④1947年、米・日反動の指導で最右翼の文化団体「自由文教人連盟」が生まれると、直ぐにその中心勢力として活動を始め、今度の「期待される人間像」と「建国記念の日」の設定に至るまで、一貫して軍国主義思想の養成に全力を挙げた。西田哲学一派は、この様に、戦前も戦後も、最も反動的な運動続け、現在も続けている。

つづく

羽生・なめがた最後の漁場に行く 伊東弓子

日程を考えるに当たって大部悩んだ。参加者人数、駐車場、見学の場所、道程をどう組もうかと。彼、此考えた揚げ句、集合場所は小川の与沢にある手接神社とした。玉造、高須の海から川へ入られた日本武尊、梶が折れて無くなり、そこで命名された梶無川は、玉造、芹澤で河童の悪さの話が生まれ、人の渡る橋を手奪橋と名がついた。前回歩く会の時、芹澤家との関係もあつて紹介した。悪さをした河童の腕は梶無川の上流に流れついたという。その土地の孫衛門(長島)が見つけ、芹澤家に連絡。当主の俊幹は、与沢新橋の近くに霊を祀り、手接神社と名づけた。現在の手接神社の前身だそう。一つの川の流れが時代や地域を繋いで歴史や文化を作つて育ていく。そこには人が生きていくんだと、改めて思い、それに気がついた自分を自賛して決めた。

今回も天気には恵まれた。神社の東側の、森が陽射しを弱くし、木々を伝わる下風が冷たさを感じさせる。その所為か参加者は来るかなと心配になってきた。参道入口の青い幟は目につくかと不安が募つて来る。そこへ総代さんと会計の人が「まあ、お待たせ。さあ早く入って」と、社務所へ案内してくれた。と、同じに参加者も集まつてきた。元気のいい方で座布団が並び、暖房が入り、「さあ落ち着いたらお茶どうぞ」と、会計算に配るように話している。思わぬ接待に驚いた。神社の経営のこと、草刈り掃除のこと、劳いの気持ちなど明るく話してくれた。「家の仕事はみっちりやり、趣味も楽しんで、地域のことは声かけ合つて皆でやつていく、という考えで進めている」と気持ちちが伝わって来る。お賽銭をあげていただいたら「糸

のお守り」「お札」をどうぞと、ぎつくばらんに声をかけ、「今日是有難い。大勢来てくれて。この人達が一人一人に手接神社のことを話してくださると。聞いた人が来てくれる。嬉しいご縁が繋がっていく」と、笑顔で境内を案内してくださった。

お二人は池の草刈りに、私達は参道を後にした。経塚は、道路に面しているので、立ち寄った。

他にすくも塚、御腰掛石、御箸芦、親鸞堤、阿弥陀如来画像など親鸞聖人に纏わる話と、遺跡のある地域だ。塩海道と呼ばれる道だ。古くからの通りを沢山の人達が歩いたことだろう。一月十六日やぶ入りの日、喜八阿弥陀の縁日に行ってみた。長年の願いがやっと叶って当家人、土地の人と一緒にひとときを過ごせた。

橘郷堂神社に向かったが、情けない報告をすることになった。この神社参道入口に立つて実に腹立たしく、悲しい出来事を目にしたのは、昨年若葉の風の爽やかな頃だった。美しい銅像の弟橘姫が姿を消していた。制作した沖洲の宮路さんに報告すると、既に知っていて落胆の度合いも酷く何と言っていないか、言葉もなかった。

玉造時代、故郷を大切に思う職員の高埜さんの協力と、地域の歴史や物語を形にして表現する宮路さんの思いで、出来上がったものだった。神社は古く、弟橘姫と木花開那姫が合祀されている。弟橘姫のことは、東京湾の物語で袖ヶ浦、木更津のことは知っていたが、故郷のこんな近くにも存在していたことを今回知って、嬉しかった。羽生、立花、筭崎の名の起り鳥塚橋、筭、お帆呂山など後でゆつくり歩いて確かめてみたい。

防人の歌碑、防人として三年間の長い苦しい兵役の間に、故郷を忍び、家族への思いを馳せて歌っている。羽生、助丁占部広と、稔木、若舎人部

広足、二人の歌碑が立っている。狭い場所だが、地区の公民館と奥の方に石佛が並んでいる。寺でもあった所かどうだろう。この二人は無事に帰ってこられたものだろうかと思像する。

萬福寺。「町中は道が狭いので、お寺の裏の駐車場へ行きましょう」と、羽生から参加の方が先頭に立ってくれた。谷津田に添って進むと直ぐに着いた。総代さんも参加してくださって、住職さんも待ってましたと許りに出てきてくださった。長い年月を経ってきた本堂、阿弥陀堂が静かに歴史を伝えてくれている。古い墓、新しい墓が佇む中に一際目につく、平氏の墓があった。阿弥陀様を見上げながら話を聞いた。仁王門の仁王さまの姿は、木像の佛ならではの力を頂く思いだった。子供の頃、寺にいた「亥のさん」が、羽生の祇園まつりによく出かけて行ったと話してくれた。羽生にある寺がうちと同じ「雷電山」だ。と、若い頃の楽しかった思い出話の中で聞いたことがある。羽生公民館の駐車場は使わず仕舞いだった。あとでお礼に行こう。

玉造も小学校統合が進んだ。羽生小も廃校になり校舎内から声もない。運動場にも姿がない。以前は高台で羽生館があったという。子供の多い頃に建てた公立保育園も子供が少なくなり、学童保育の建物に変わり、今は使う人もなく、全く淋しいという。

鹿島参宮線、桃浦駅跡はホームが残っているだけで、個人のものになったそうだ。家が一軒建ち、太陽光発電が備えつけられた。桜の木と駅名が彫ってある碑は以前の賑わいを語ってくれそうだ。

ドアーが開くのが待ち遠しいように降りて海水浴場へ走っていった子供達。発車時刻に間に合わず飛び乗った勤め人、遠くへ旅立つ人との別れなど

あったろう。

桃浦海水浴跡に立った。と言っても堤防が水面と地面を隔ててしまったから、全くあの日の海水浴場は想像が出来ない。透き通って砂が見えた水はない。手で掬って飲んだ水もない。漁に出て行った舟の影も映らない。羽生館、羽生の村を衝るべき津の働きも浮かんでこない。碑の近くにある公演で、子供と祖父母の遊んでいる姿が見えた。その情景が私の心を和ませてくれた。

漁をしているのは一軒だと聞いた。下見の時に寄ったが留守だった。その後、何うことがなくそのままになって今日説明も出来ない。

高浜入干拓のことも聞いてみた。「本当に一生懸命やったのは、こっちの方(八木蒔、羽生、沖洲)だったよ。玉造の方は関係ないような顔をしていたもんな」とその響きが力弱く感じた。大変な苦労があったようだ。今、広域大型ごみ処理場の問題だつて、三市町は人事としか思っていない。同じ小美玉市だつて美野里、小川地区は他人ごと。同じ玉里地区の中の栗又四ヶ、田木谷、川中子、下玉里、上玉里でさえ他事にしかすぎないものなのだろう。「高崎の一部の婆さんらが、煩いこと、煩いこと」と、執行側の事務方、役員側では笑っているという話がある。情けない。

玉里御留川最後の漁場、<sup>⑧</sup>さこた川、<sup>⑨</sup>こぶち川は地名としても残っていない。舟溜まり辺りかと言ってはくれたがはっきりしない。

目の前に玉里の台が見える。玉里御留川を歩く会もあと三回で一周の日をむかえる。さあ一がんばりだ。私にとって羽生は懐かしい所だ。十九才の頃、仕事に疲れ、友のない淋しさの頃、よく寺歩きをした。この地にも来た。今回ははっきり萬福寺に来たことがわかった。畔を歩いていると可

愛い三角溝そばの花が沢山咲いていた。時間潰しか心を癒すためか、愛らしい花を写生している私を見たような日だった。

昼食をとるサンライズさんには、私の手違いで迷惑をかけたが、十数人の為に楽しい場を用意していただけた。男性の参加が多かったのも嬉しかった。栄枯盛衰は世の常というけれど行く先々で目にする。355号に分断された羽生の人達が元気であつてほしいと願う思いを深くした歩く会だった。

## 小幡城

小林幸枝

年始が過ぎて快晴のある日、どこかへ出かけたいなと思っていた時、突然小幡城跡へ行ってみようと思いついた。小幡城は、水戸市の南にある茨城町に築かれた城です。知名度はほとんどありませんが、遺構の状態が奇麗にのこされて在りました。深い空堀と不整形な曲輪が作り出す巨大迷路のような城跡は見事でした。

小幡城址へは、ちゃんとした案内表示もなく、スマホのナビをたよりに出かけてきました。入口付近は特に分かりにくく、見過ごしてしまいました。が、やっと城跡入口を見つけ、駐車スペースに車を止めて中に入りました。

小幡城は、大掾義幹が一四二〇年頃に築いたという説と小田光重が一三二〇年頃に築いたという二つの説があります。

文明年間（一四六九～八六）には水戸城の江戸氏の影響下にあり、現状の城域一haが整備されたのは一五七〇年代と思われる。この城は府中城の大塚氏を攻める拠点として重要な役割を果たした

といわれています。天正一三年（一五八五）の書状には小幡城将として大塚弥三郎と小幡孫二郎の名があり、涸沼周辺の土豪が当番制で動員されていたことがわかります。

天正一八年（一五九〇）豊臣秀吉の権力を背景にした太田城の佐竹義宣により、江戸氏、大塚氏は共に滅死し、小幡城も落城しました。慶長七年（一六〇二）佐竹氏の秋田移封まで、小幡は義宣の家臣和用昭為の管理以下にあり、城はその頃に廃城になったと考えられます。

空堀の深さは約十M位あり、通路も兼ねており、実際にそこに立つと深さが実感でき、興奮しました。途中に分岐あり、方角がわからなくなってしまうが、案内表示がなかったら、迷子になってしまいます。

空堀は竹に囲まれており、見上げるととても美しい光景でした。五の郭の一角にある櫓跡、四の郭と五の郭をつなぐ土橋を抜けると本丸です。そこは結構な広さがありました。本丸周囲は土塁で囲われており、当時は立派な城だったことをうかがわせます。

巧妙な縄張りや深い空堀が作り出す迷路にいるような感覚を是非一度訪れて体験していただきたいと思えました。もう少し広報して大勢の人に見ていただけたらと思います。

朝から昼過ぎまでの晴れた時に、出かけてみることをお勧めします。竹に囲まれた美しい光景が未だ目に焼き付いています。

## 【風の談話室】

### 《特別寄稿》

#### 命の河を遡り

田島早苗

（12） 終の母娘旅行

連れ合いを看取ると言う事は、父母や兄を葬るとは全く別の次元の大事だった。早紀自身、半身が痺れたままという脳内出血の後遺症を抱え、最後まで家で介護できなかった後悔に苛まれていた。亡くなった日の夜、突然足の激痛に襲われ、何をしても痛みを抑える事が出来なかった。平素「この齡迄生きただから、何時死んでも悔いは無い」等とうそぶく早紀とは違い「できる限り長生きしたい」と言い暮らしていた夫の『まだ死にたくない』と言った『と言うメッセージだと思』とお父さんの魂が足にとり憑き痛くてたまりません』と冗談めかして呟きながら『アッシー君が居なくなつた不便、思い知つたか』と言う夫の執念が見える気がしてならない早紀だった。

幸い長女の家同居していたお蔭で、すべてを取り仕切ってくれた娘に頼りっぱなしで葬儀を終え、教師生活を締めくくる大切な年の激務をこなしながら、父の人生の後始末と言う初体験に取り組んでいる娘に、心の中で手を合わせる毎日だった。

田村家の宗旨は浄土真宗の大谷派で、「亡くなって直に天国へ昇られるので、死は不浄ではなく、お清めの塩も使いません、お墓も作らず、京都の本山に納骨するのが習わしです」と教えられ『地方の名家だった田村家にお墓が無いのは変だ』という早紀の結婚以来の疑問も氷解したのだった。

早紀と違い信心深かった夫が、どうしてもお墓を作りたいと言って、牛久大仏の墓地に十五年ほど前墓を建立、第一号の仏として納まることになったのだった。

さて、夫の死の記憶も生々しい十一月半ば、『終の母娘旅行』に出かける事に成った。

介護体制も万全な『看取りのケアハウス』に入居出来ひと安心、長期の看取りを覚悟していた矢先、これほどあつけなく逝ってしまうとは夢にも思わず、旅行するなら今だと、有馬温泉二泊三日の段取りがすっかり完了していたのだった。

「間際のキャンセルでは、ほとんどお金が返ってこないし、お父さんは天国に行ってしまったし、きつと許してくれるよ」と娘二人に説得され、痛む足に不安はあつたが、傍から見ればいづぶん不謹慎と思われるだろう二泊三日の旅行が始まった。

東京まで乗り入れるようになった常磐線が上野駅を素通りすることに感激、痛い足を引きずりながら『のぞみ』まで辿り着いたお上りさん丸出しの早紀。

弁当を買いこんで来た次女と横浜で合流して、ようやく旅行気分が盛り上がって来る。

事前の下調べも全くしなかつた地理オンチの早紀は、有馬温泉が兵庫県の有名な観光地だとも知らず、旅程も娘たちに全てお任せの気楽さだった。

新神戸駅で予約してあつたレンタカーに乗り込み、次女のリクエストで、第一の目的地六甲山のロープウェイに向けて出発！

カーナビに目的地を設定して順調に滑り出した一寸乗り心地が悪い車。本当は娘の慰勞旅行にしたかったのに、此処でも娘たちに頼りっぱなし

の情けない母親だった。

地図を見ればロープウェイ乗り場までそんなに距離があるとは思えなかつたのになかなか目的地に到達せず、道は曲がりくねつた山道になり、紅葉を楽しむゆとりもなく、必死で運転する長女を気遣いハラハラドキドキの連続だった。

「ロープウェイに乗るのにどうして山道を登るのだろうか？」と不思議でならない早紀だったが、方向オンチで地理オンチの私が口を出す事では無いと思つて居る間に、見晴らしの良い休憩所に到達、そこから見下ろす絶景に暫し見とれて周りの紅葉に癒され、再び車中へ。

更に上り詰めたところにロープウェイの乗り場駅があつた。駅の内部で軽い昼食をとり、切符を求め行列に並んだが、何かおかしい。同じ発着所でもそこは下りの駅だった。

車を山頂に置いたままロープウェイで下るわけにもいかず、間違つて登つてしまつた六甲山を今度は車で下る事に：

「後ろの座席で横になって居れば」と言う娘たちの氣遣いを受けて横になつたのが間違ひの基だった。急カーブの下りで頭は下がりっぱなし、曲がる度に右へ左へぶつかり、体形を変える事も叶わず、吐き気が込み上げてくる。へとへとになつて我慢の限度に達する寸前、ようやく麓へ到着。

カーナビに打ち込むとき『六甲山ロープウェイ』と打ち込んだのが間違ひの基だったらしいが、何事も無く下山出来た娘の運転技術に感謝感激の早紀だった。でも怖かつた！

有馬温泉街の外れに聳える会員制のリゾートホテル『有馬離宮』に知り合ひの伝手で泊まれることに成りそれが旅程を変更できなかった一因でもあつたが取り敢えず宿へと言う事で辿り着いた施設のゴ-

ジャスな雰囲気に圧倒され、暫し無口な三人だった。

荷物を部屋に置き身軽になつた三人は、きびきびと働く青年従業員に丁寧に見送られ、娘達だけだつたら歩いて行つただろう温泉街の散策に車で行く事に成つた。然し、坂の多い街は駐車場が限られ不便極まりない。

有馬温泉は太閤秀吉が愛した街で、至る処に秀吉を偲ぶ地名や、名所旧跡が点在する。『大閤橋』は変哲もない地味な橋だったが、『寧々の橋』は朱塗りの立派な橋で、その入り口の見事な大木の紅葉に抱かれるように寧々の像がひっそりと佇んでいた。

美しい紅葉に感極まり、老醜を晒したくないと近頃は避けがちだつた写真に、寧々の像と並び笑顔で収まつている早紀だった。

紅葉に映える渓谷に架かる寧々の橋を渡りながら、秀吉が頻繁にこの地を訪れたのは何時頃だったのか、激動の生涯の中で愛する寧々と憩ひのひと時を過ごすことが出来た秀吉が、一生懸命寧々のご機嫌を取つている姿を想像して心が温まる母娘だった。

温泉街には多くの名物外湯が点在するらしいが、太閤が最も愛したと言う金の湯には絶対入ろうと言う事で、暖簾をくぐる。

金の湯と言うからには、金箔が浮かぶ湯だと想像していたが、それは赤く濁つた鉄分の多い温泉だった。

体の芯まで温まり冷め難いと言う金の湯を楽しんだ後、土産物が並ぶ街並みを冷やかしながらゆつくり歩く。平和日本の縮図みたいな観光客の多さに衝撃を受けながら。

夜の食事は鉄板コースが予約してあつた。貧乏

性の早紀が聞いたら、目ん玉をひん剥きそうな値段らしいが、折角ゴージャスな宿に泊まったからには、せめて一食位はと、予約を入れてくれたのだった。

卓を挟んだ正面の鉄板で、専属の料理人がもったいぶった華麗な手捌きで一品ずつ焼き、食材にマッチした器に盛り分けてくれる。

早紀達の専属料理人は、横浜の孫と同年の二十三歳。それにしてもそつない受け答えや、料理の手捌きの見事さに舌をまくばかり。

北海道から上京して修行した話から、母親の思い出に及ぶと、年相応の愛らしい顔がのぞき、和やかに会話が弾む。

ガーリックライスで締めくくった夕食はどれも美味しかった。少量だと思っただのに種類が多く、何時の間にか満腹になっていた。

その後、クリスマスツリーの点灯式イベントが行われると聞き、部屋へ戻らず、広い中庭を見渡す場所へ。

肌を刺すような冷気の中点灯式までの時間の長かったこと。金の湯の温泉効果もすっかり冷めはてた頃、オルガンが鳴り響き、音楽グループの歌が始まった。それがだらだらと長く、もう我慢できないと部屋へ戻りかけた所で点灯の秒読みが始まる。

一斉に煌めく庭の木々、水路に揺らぐ小さな灯籠舟の数々、高層ホテルの屋上から流れ落ちる滝花火に続く連続打ち上げ花火。夢の様な光の競演に寒さも忘れ立ち尽くす。

部屋からガウンのまま直通のエレベーターで行けるホテルの温泉に浸かり幸せいっぱい第一日は終わった。ホテルにも一寸薄めの金の湯があったのは望外のご愛敬…。

二日目、早めに朝食を済ませ、第二の目的地『鳴門の渦潮』を見に出発！

「遠くて大変ですよ」昨夜の青年料理人の言葉通り十一時五十分の大潮を目指してひた走る道程は長かった。

見事な紅葉の連なる高速道を過ぎ、全長三千九百一十米の明石海峡大橋を渡り、淡路島の高速道に入る。

途中コンビニで小休止しただけで、大鳴門橋へ。紅葉と橋尽くしの道が終わったら、鳴門の渦潮は目の当たりだった。

『うずしお観潮船』乗り場は、観光客で溢れていた。大潮に間に合って、ほっと一息、列に並び出港を待ちながら、代わる代わるお土産売り場で品定めをする余裕だった。

四方八方で渦巻く海面は迫力満点だったが、何か物足りない。「上から見下ろさなければはつきりした渦の形は見えないよね」と言う事で船を降りると、大鳴門橋の下に設けられている渦の道を目指し、再び車中へ。

しかし今度もナビに入れ間違ったらしく、大鳴門橋を渡り切っても渦の道への入り口は無かった。再び大きく迂回して大鳴門橋に戻る。ようやく『大鳴門橋遊歩道』にたどり着いた時には、大潮のピークは過ぎていた。

全長四百五十米の遊歩道はあまりにも長すぎると、備え付けの車椅子へ。遊歩道は所々ガラス張りになって居て、標高四十五米から見下ろす渦潮は、見事だった。と言っても高所恐怖症の早紀はガラスの床には立てず、怖々横から覗き見るだけだった。

観潮の最良スポットにいた案内人の丁寧な説明を受ける「一時間くらい前だったら、最高の渦が

観られたのに残念でした」と言いながら取り出したポストカードには最高の渦潮が写っていた。「このような渦は滅多に撮れないですよ、よろしかったら記念にどうぞ」と頂いて戻りながら、ナビを信じて無駄にした一時間が口惜しくてならなかったが、初体験の車椅子に感謝感激の渦の道だった。疲労の激しい長女に代り次女の運転で、四度目大橋を渡り、一路神戸へ。ポートタワーから神戸の夜景を観るのだと言う。

ポートタワーの近くで、休息を兼ねて昼食をと入った館は満員だった。セルフの食事を求めるのも、座席を確保するのも時間がかかり、少しも休息にならなかった館で不本意な昼食を終え、早紀の希望で湊川神社へ。

戦中派で歴史好きの早紀は、楠木正成の物語を聞くのが大好きだった。

後醍醐天皇に出会い、忠誠を誓った正成が、死を覚悟して我が子正行を故郷の河内へ返す「桜井の別れ」の唱歌や、兵庫の湊川での戦い。更に十二歳の若武者に成長した正行が父の遺志を継ぎ、朝敵を打つための出陣に際し「かえらじと、かねて思えば梓弓、亡き人の名をぞ留めん」と如意輪堂の扉に書き残して壮絶な戦死を遂げる物語に涙した小学生の思い出は今も脳裏に焼き付いている。明治元年明治天皇の『沙汰により創建されたと言う湊川神社の立派な社殿には、境内に併設された菊水天満神社の例祭が仰々しく張り出され、参拝者も果たして楠木正成の故事を知っているのだろうか？ 心許無い。

境内には『楠木正成没地』の記念碑や水戸光圀の揮毫と言う『嗚呼忠臣楠子の墓』の墓碑を囲む『大楠公墓所』が建てられているという事だったが、足の痛みに耐えかねて早々に引き上げたのが

心残りではない、全く時代遅れの早紀だった。ポートタワーは夜景を楽しむ人で賑わっていた、最上階へはエレベーターが通じていないので、階段を歩いて登る娘たちを見送った高所恐怖症の早紀は、窓際に近づかない様に気を付け乍ら、人間観察を楽しんでいた。楽しそうな親子連れ、肩寄せ合う二人連れは、夫婦だろうか恋人だろうか等と失礼にならぬよう気を付け乍ら見ていると隠れた物語が浮かび上がってくる様だ。

起伏の激しい街の夜景はそれなりに素晴らしかったが「東京や横浜の夜景も負けていないよね」と娘達。その後夕食の美味しそうな店を求めて彷徨ったのも楽しい旅の思い出となった。

最後の日は朝から雨だった。でも、唯一の心残り、六甲山のロープウェイに乗ると言う。「こんな雨降りに上っても、きつと何も見えないよ」と反対する早紀に、妹の気が済めばそれで良いからと、あくまで優しい長女。

ロープウェイ乗り場には、折角来たのだからと思う人？で混み合っていた。一台やり過ごし乗り込んだところで、次女がお得意のビデオカメラを構え、撮り始めた。右も左も雨に濡れて色増した紅葉が絶え間なく続き、心も体も紅葉に染まりそう。霧が立ち上る山々の遠景は、雨の日ならではの絶景だった。上りも下りもカメラを回しっぱなしの次女に「良かったね」と心の中で呟いていた。

帰りの列車まで少し時間があるので、秀吉の記念館を見学。秀吉の湯殿跡などを見ながら、有馬温泉をこよなく愛した秀吉を偲び、記念館近くの蕎麦屋で美味しいそばを堪能。

「貴方も私もいい子に恵まれ幸せでした。私ももう少し頑張るから、のんびり待ってて！」

心の中で夫に呼びかけながら素晴らしい旅は終わった。

(続く)

### 《読者投稿》

やささと暮らし (12)

さと女

・落ち葉の始末

真冬の寒さ、近くの溜池(池之端バス停)が此処数日の間、全面結水している。そして田んぼや畑が霜で真っ白に。顔がツンと刺された様に痛い。それでも陽が射してくると陽だまりはポカポカ、お隣の猫は陽だまりでまったりと、お婆ちゃんの座る椅子も猫に占領されている。

数日後、爆弾低気圧の強風で、蕾が沢山ついて楽しみにしていたミモザの樹が折れてしまった。風は1日中吹き荒れ、隣の柿畑から飛ばされてきた、木の葉が吹き溜まりに。朝から吹き溜まった落ち葉の始末、コマ袋に詰めても詰めてもきりがない。隣の酪農家さんから、牛の飼料が入っていた大袋を貰いその中に詰めた。立ったり、座ったり。

一段落後、ホームセンターへ行き、落ち葉などを吸い込むブロアーを買ったが、遠目で見ている限りあまりスムーズではなさそう？それでも綺麗になりました。

投稿したその写真を見た、長井農園のご夫婦さんが軽トラで落ち葉を取りに来てくれた。4日間も連続して吹き続けたため、野焼きも出来ないでいたので助かった。農園主さん来年も美味しい野菜お願いします。

・忘年会とクリスマス・コンサート

山酔会、月1恒例の集まり。場所は羊肉レストラン“ひつじの郷”今回は忘年会と言う事なので参加した。それにしてもこの会、石岡との合併の時からなので、10年とうに過ぎた。1度も欠かさず毎月よく続いているものです。何かをやるのか、決めるのかという会でもなく、集まっては主のTさんの作った料理を食べる。今回はオカリナ奏者Nさんや趣味でハーモニカを吹いている方の演奏もあった。

別の日、昼は“風の会”恒例の忘年会。会員Sさんから、搗き立てのお餅(あんこ、ごま、納豆、きなこ、からみもち)を頂く。あれやこれやと今年を振り返った。同じ日午後5時からクリスマス・チャペルコンサート「マリアージュ吉野」で食事。併設のサンタマリア教会で山本恵莉子さんの歌の世界へ。チャペル一杯に集まったファンの前で17曲を熱唱。透き通った声で人生を歌い上げる愛の歌、地域を元気にしてくれる応援ソングなど、今後益々の活躍が楽しみです。恵莉子さんの笑顔にホッと癒されました。

クリスマスライブ「まんまや」で、クリスマスコンサート。午後4時から蕎麦を食べ、5時から室内楽のコンサートが始まった。クラリネット、オーボエ、ピアノの珍しい取り合わせの演奏会。息子がクラリネット奏者、打ち上げまで出て帰りは9時を大分周っていたが、何とも充実したクリスマスライブでした。

・友人の楽市さんと

楽市さんより昼食の誘いがあり出かける。社長は寒空の中ログハウスの改修中。着々と工事が進

んでいた。大きな窓が入り2階からの景色が変わる。それにしても社長の何でも出来るのには驚く。あらゆる資格を持っている様だ。ログ2階から左前方を見ると富士山(152m)がみえる。郷土富士でフジヤマと呼ぶらしい。何とものどかなり。

翌日、那珂市の一乗院で行われている、喜林堂主宰の骨董市へ。処狭しとテントが並び大勢の人でごったがえしていた。骨董のセリなども面白かった。その後水戸京成ホテルで昼食を済ませ、常陽史料館で開催されている高橋協子さんの民話の世界展へ。作品を堪能した後自宅に戻り、犬の散歩を済ませた。

#### ・おのみそか

支払いなどがあり瓦会の郵便局へ、中々正月気分を味わえないでいたが門松が飾ってある。やっと、もう直ぐお正月が来るんだと実感した。今年は近い人との別れが∞人もあったが喪中はがきも出さずに、正月明けに寒中見舞いとして出すことにした。

郵便局の庭には鈴なりに赤い実を付けている樹木がある。局長さんに尋ねてみるとクロガネモチの樹との事、野鳥たちが賑やかに囀っている。名前からか、縁起の良い樹だとか？

明けない夜はありません。ラジオ深夜便を聞いているとアンカーさんが言っていた。そうですね。何があっても明けない夜はありませんでした。そして今年も終わりです。おかげさまで穏やかな朝を迎えられました。皆様お世話になりました。来年もよろしくお願いします。

#### ・厳寒の年明け

新年おめでとうございます。今年もお付き合い

のほどよろしくお願いいたします。楽しい事がいっぱいある年になりますように。

姉と姪たち家族が来るとの連絡があった。その前に常陸國総社宮へ初詣、お参りを済ませると何となくお正月気分になって来た。姪たちは三浦半島近くなので海産物のお土産を沢山持って来てくれた。姪の旦那は昔、海産物の仕事をしていたこともあり包丁さばきがキレイ、みんなで食事の用意をして宴会となった。久しぶりの賑やかな食卓、やっぱり楽しいですね。

年末に義弟から送られてきたDVDが100枚ほど。アカデミー賞受賞作品など見たかった作品が沢山入っている。この時間をどう作るか、2人暮らしても結構忙しい、お互いの時間を邪魔したくない、幸いに離れがあるのでそこで一人鑑賞を楽しむことに、おかげで、またまた、終活が遠のいた。

#### ・花粉

昨晩はだいぶ冷え込み星空も素晴らしかった。そしてまんまるの大きな月も。

日中郵便局へ行く道中雑木林のあまりの綺麗さに車をおり、さくさく落ち葉を踏みながら歩いた。まわりの山を見ると杉の木は黄色く色づいている。ああ〜またこの季節が、と思いがら家に帰ると其のあと強い風が吹き荒れた。案の定、夕方から鼻水がダラダラと、昨年貰っておいた薬を探すがない、大事に仕舞い忘れてしまった。

定期便のTさん、今年初めて安否確認に来てくれた。空気はピンと張りつめて冷たかったが、青空の下、庭で

お茶の時間となる。ペレットストーブ「きりんさん」に火を入れると、間もなく暖かくなり、や

かんの水もカンカンと湧いた。Tさん帰った後家に入りふとテーブルの下を見ると、昨日あんなに探し回っていた薬があった。あの時間は何だったのだろう。

#### ・春の兆し

1年前のFBを読むと、春のような暖かさで冬は寒くない？などと書いてある。大きめの地震が頻繁に。昨日も大きな揺れが2回あったと書いてある。そして、フキノトウの写真が掲載されていた。今年の寒さは厳しい。近くにある溜め池は連日の全面結氷。この寒さではフキノトウはまだだろうと思いつながら同じ場所に行くと見ると、出ているではないか！小さいが10個程が顔を出していた。そして、昨日は地震の警報に驚かされ、夜には地震が。今年は穏やかな年であって欲しいなあ！

連日の寒さ、小屋の中でコロちゃん丸まっている。寒そうなので、ふわふわの毛布に変えてやる。が、どうも気に要らない。小屋に敷いても、敷いても掻き出してしまふ。∞日目にしてやっと落ち着いた。どうやら暖かくて気に入った様だ。今年も元気でいてね、コロちゃん。

#### ・ラジオは友達

何気なくラジオを聴いていると、あれエ？聞いた事のある声だ。夫の話している声がある。そう言えば数日前に茨城放送のレポーターが来たと言っていた。茨城県から無作為に選んで、石岡市の柴間を探そうというタイトルだった様だ。この地区はどのようなところですか？とか、今どのような事をして過ごしているのですか、とか。本当にいきなりマイクを向けられるんだと言っていた。

帰り際自慢できる場所がありますか？と質問されギター文化館を紹介した様だ。柴間で自慢できる所といったらやはりギター文化館ですね。

#### ・夫の着物デビュー

八郷に住んで初めて何も予定のないお正月、夫は今年こそ着物を着るのだと宣言していた。箆箆の中には30年も前に仕立てた着物が2組ある。天気も良かったので笠間稲荷に急ぎよ出かけることにし、急いで着物の躰糸をとり着付けを済ませた。私が運転して笠間稲荷へ。道や駐車場は大変混んでいて、鳥居から参道まで、は長い行列だったので、お参りは諦めお店をブラブラ。

八郷に戻り「まんまやさん」へ、食事後樂市さん、更にオリーブさんへと新年の挨拶を。やっと着物デビューが出来、さぞかし着物も喜んでいただろう。

#### ・定期診察

血圧などのチェックの為、2か月に1度の診察日、年明けに採決の予約あり、診察前に採決となる。出かける前から嫌な予感、ウエストがやたらキツイ。嫌な時期に予約と、後悔した。年末から正月にかけての暴食、体重も？キロも増えている。予約変更も考えたが、そうもしてられない。採決後少し待って結果を、結果表を見ながら先生がマーカーで印を。私を見て、ニヤリと「心当たりありますよね？」と、次回また採決予約となった。つけは回ってくるものですね。

### 《風の吹き》

#### 武将の運

#### 打田昇三

戦国の武将は、合戦でどちらに付くかで運命が激変するのは致し方ないが、一度は敵対しても許して貰える場合と駄目な場合があつて其の基準は曖昧であつたから当事者は苦労をしたと思う。

関ヶ原の合戦で、九州の雄・島津氏は敗者の西軍に属して藩主・義弘が徳川家康の本陣に攻撃をかけながら、何のお咎めも受けずに六十万石余の薩摩藩を存続させている。それどころか二百六十年の後には藩の下級武士たちが徳川幕府を倒す原動力として動き明治維新を実現させたのである。

「大阪夏の陣」で豊臣家が滅びた後に府中(石岡)藩主となつた皆川山城守廣照と言ふ武将は、かつて一万騎以上の軍勢で北条方に付き小田原城の一方を固めていたのだが、秀吉の大軍が包囲するのを見て「是は負ける」と判断したから直ちに敵陣にメールを送り降伏を表明した。秀吉は「ギブアップの判断が早い」と妙なところで感心をして「…彼は年賀状や暑中見舞いなどを呉れていた」という理由から簡単に許したので、廣照は部下百名を連れて小田原城を脱出している。皆川氏は、室町時代に「関東八家」と称された長沼一族で代々に下野大掾を務めた家系である。同じ「大掾」でも常陸大掾より一つ格下だが世渡りは上手であり、やがて豊臣の衰亡を見越し徳川氏に接近して家康の七男・松平忠輝の守役として七万五千石を与えられたが、忠輝の乱行で滅封され石岡には一万石で封じられたのである。

それに比べて桓武平氏の源流を継承する常陸大掾氏が石岡で早々と滅亡したのは惜しい。常陸国には源氏系の佐竹氏が頑張っていたからであ

ろうが、そればかりでは無いような気もする。

#### 坊ちゃん大名

#### 打田昇三

関ヶ原合戦で西軍(豊臣系)を仕切っていたのは石田三成だが、総大将は備前岡山・五十七万四千石の大大名で中納言の官職を持つ宇喜多秀家である。妻が秀吉の養女(前田利家の娘)なので西軍のトップに据えられ一万の兵で布陣していたところ小早川秀秋の内通で西軍は打撃を受けた。

怒つた秀家は敵陣に突入しようとして重臣に止められ戦場を離脱。主従僅か三人で伊吹山麓周辺を彷徨つてから土地の郷士に保護された。此の時に当然ながら郷士は秀家らの素性を怪しんだけれども秀家は持っていた名刀を渡して沈黙させた。郷士は与えられた太刀の値打ちが尋常では無いと分かり、有るだけの小判を差し出したけれども秀家本人は貨幣の使い道が分からない。

家臣が其の金を使つて各地に潜伏してから何とか薩摩まで落ち延びた。しかし薩摩では当主の義弘が徳川家康に恭順の意を表して家督を忠恒に譲り隠居していたから匿つては貰えない。西軍総大将であつた秀家が許される確率はゼロに近い。

頼られた島津義弘は「窮鳥、懐(ふところ)に入れば獵師も是を殺さず」という諺を思い出して図々しいのを承知で井伊直政らを通じ、家康に宇喜多秀家の助命を嘆願した。秀吉の治世下では徳川家康、前田利家、上杉景勝、毛利輝元と五大老の地位に在つた秀家であるが、実力は家康に見抜かれている。本来は処刑されるところ嘆願の効果で「駿河の九能山に幽閉後、八丈島に流罪」とされた。家族・使用人の同伴が許されたいか

ら大物戦犯としては破格の扱いであった。島に五十余年居て八十四歳で他界したという。考えようによっては一番、幸せな武将だったかも知れない。

## 関東平野が広いわけ

菅原茂美

石岡に住んで58年。この狭い日本列島で、関東平野だけが、どうしてこんなに広くなり得たのか、常々疑問に思っていた。

日本の国土面積38万平方メートル。関東平野17万平方メートル。約5%を占める。日本の平野面積9万平方メートルの19%。そこに日本人口の34%が今住んでいる。ではこの狭い日本列島に、なぜこんなに広い平野ができたのか？

まず現在の日本列島は日本海開裂前、ユーラシアプレートの東端に載っていた。ところが、今から1900万年前頃から、太平洋プレートが、真東から年8cmの速さで押し寄せてきて、ユーラシアプレートの下に潜り込んだ。するとユーラシアプレートの東端は盛り上がり、円弧を形成し、逆にその奥は窪んで沈み込み、日本海となった。潜り込まれて盛り上がったのは、北上山脈、房総半島、三浦半島などである。その内側は沈み込みが生じ、平野（北上平野・関東平野）となり更にその内側は、両プレートの摩擦により生じた火山の連山。千島列島・北海道火山帯・奥羽山脈・アルプス山系・阿蘇・鹿児島山系などである。更にその内側は、外延部の盛り上がりの反動として沈み込み、日本海が発達し、列島は大陸から切り離された。

そして日本列島の東半分は、北米プレートに潜られ、更にその下に太平洋プレートが潜る形となり、全体的に北北東に圧力がかかり、反時計回り

に回転する事になった。一方ユーラシアプレートに載っている列島西半分は、南西方向から押し寄せてきた「フィリピン海プレート」に押し込まれ、西北西方向へ時計回りに回転し、関東を境に列島はグクリと押し曲げられて「大地溝帯」が形成され、これが関東平野となった。すると当然真ん中は、東西両方に引つ張られ、窪みができ、山が少なく平坦な面積を増す事になる。

伊豆半島及び伊豆諸島は、太平洋のど真ん中で、フィリピン海プレートに太平洋プレートが潜り込んで出来た火山列島である。その伊豆半島がユーラシアプレートに衝突する事により箱根連山が造られ、富士山が何度も噴火を繰り返し、霊峰を形成した。日本列島に「郷土富士」として321座の富士山がある。なお869年貞観地震の余震として日本列島は18年間も巨大地震や火山噴火を繰り返した。富士山も874年貞観大噴火を起こし、最後は1707年の宝永大噴火である。東日本大震災からまだ7年しか経っていないが余震として富士山の大噴火が懸念される。

今から7万年くらい前、地球は寒冷化し、海面は今より120メートルも下がり、東京湾も霞ヶ浦も当然陸地となった。そして房総半島と三浦半島は陸続きとなった。しかし少しずつ温暖化すると、東京湾や霞ヶ浦は復活し、周辺の低地は、利根川やその他もろもろの川により、上流の土砂などが運ばれてきて埋まり、広い平坦地が造成される事になった。

現在茨城県の耕地面積率は、全国第1位であり、農業生産高は北海道に次いで第2位である。従って昔、常陸の国は米・絹織物など、全国一豊かな国であり、当然天皇家が見逃すわけもなく、「親王領地」となり、天領地であった。

徳川家康は秀吉のいじめにあい、武蔵の国を拝領する事になったが、茫洋とした荒れ野原で水害が多く、人も住まなく米もほとんどとれない。しかし家康から3代家光にかけ、我慢に我慢を重ね、利根川と荒川が合流して東京湾に注いで水害を起こしていた本流を、大規模水利工事により銚子に出口を変え（利根川東遷、干拓・水田開発・水運開発し、新しい「都」江戸に幕府を開いた。江戸が名古屋、大阪、京都のような碁盤の目のようにできな理由は、デコボコが多すぎるという事。東京の地名に渋谷、四谷、雑司ヶ谷など「谷」、赤坂、潮見坂、富士見坂など「坂」、駿河台、高輪台、白金台など「台」などが多いのはプレート摩擦により、「正断層」「逆断層」が多数発生し、高低が激しい証拠。地下鉄の駅が隣では地上3階に存在したり、東京駅が海拔3メートルなのに、渋谷のハチ公前15メートル、都庁は40メートルなど、凡そ首都というには、荒涼過ぎる土地柄であった。これも多発する地震と関東平野を暴れまわった利根川などの水害の所為である。

さて茨城県は非常に地震が多い県である。その理由は、本県が載っている北米プレートを、西側はユーラシアプレート、東側は太平洋プレート、南西側はフィリピン海プレートがそれぞれ強力な圧力で押し合いへし合い、押し競饅頭を繰り返しているからである。世界中に4枚のプレートが1点に集中している所は他にないとの事。これでは常陸の国「一宮」・鹿島神宮の「要石」が、いくらか大鱧を押さえつけても、地震の頻発は免れない。

\*余談・日本の「公用語」は日本語、首都は東京という法律はどこにもない。

（出展：カッパブックス・「日本列島100万年史」他）

## 【特別企画】

打田升三の私本・平家物語

巻第七・(三・1)

筋書きに影響は無いが、此処で最初に出てくる「聖主臨幸」は原本に依って「(二十四)」で書いた「維盛都落」に含まれているものがある。内容からすれば、其のほうが相応しいかも知れない。

本来は、平家が都落ちに際して焼いてしまった京都が歴代天皇の足跡を残す貴重な場所である……と言いたいのであろう。其れよりも罪も無いのに家を焼かれました。庶民の事を考えて貰いたい。

今回書く部分の見出しには「〇〇落」が多くて落語か洗剤のコマーシャルだと喜ばれるが、言葉を変えれば「逃亡」であるから既に平家が「死に体」であることになる。振り返ってみると木曾義仲が平家の大軍を倶利伽羅谷に追い落とし、その寿永二年(一一八三)の五月十一日であり、六月一日には後年に歌舞伎で弁慶が素晴らしい芝居を披露する安宅関で平家軍は又もや大敗を喫してしまう。幼児の木曾義仲を助けた斎藤実盛は、皮肉にも其の合戦で木曾義仲軍に討たれる。

勢いに乗った源氏軍(と云うには何か欠ける木曾義仲の軍勢)は七月二十二日に琵琶湖を渡り比叡山に登った。巻第七の「木曾山門牒状」及び「返牒」によつて比叡山の僧兵たちは、既に平家を見限り源氏に味方すると決めている。そう言う状況は勿論平家にも伝わっていたであろうから平家の対応は「降伏するか」「戦うか」「逃げるか」の三つしかないことになる。

厳しい状況下で平家が選択した手段は「京都に火を放って逃げる」という最低で無策で人道的に

してはならない方法であつた……現代の感覚ではそうなるのだが、平安時代の末期から戦国時代にかけては、合戦の手段として「放火」が頻繁に行われたようであるから平家だけを糾弾も出来ない。しかし京都は当時の日本の首都である。平家が好き勝手にして良いと言う理屈は成り立たない。

落ち目になることは予測されていても巻七に入つてからの「平家株の暴落」は実に急激である。今回の章段は「聖主臨幸」からであるが緊急事態の平家に無用な題名である。是は「維盛都落」の最後の記述を受けて、平家が放棄し逃げて行くこととする屋敷は、平治の乱などで当時の天皇が避難されたりした場所である……と勿体ぶつて言っているらしい。天皇が来ようが神様が宿ろうが、どうせ平家が焼いてしまうのであるから、中途半端な権威付けは敗者の哀れを誘うだけである。

### 聖主臨幸(せいしゅりんこう)のこと

都を護り切れない平家が現代的に言う「自暴自棄」で焼いてしまおうとする京都の、特に平家一門が居を連ねた辺りは二条、高倉、安徳の各天皇がしばしば行幸をされた場所である。此の火災により高樓は虚しく礎石を残し、天皇の輿(こし)を置いた跡だけが其の俣に残り、皇后など女性たちが遊宴を楽しんでいた場所なども吹く風が寂しげである。庭園の草木に置く露も憂いの色を見せ天皇や公家たちが遊び戯れていた場所も過去の栄華が虚しく身に染み、全て平家の放った火に焼かれてしまった。立派な平家屋敷さえ燃えたのであるから、家臣や一般市民の粗末な家などは瞬時に灰になり、跡さえ分らない。火災は遠慮なく広がるから平家屋敷だけに留まらず在所数十町に及んで京都は焼け野原と化した。迷惑な話である。

是を異国の例に譬えれば「強呉忽ちに滅びて姑蘇台(こそだい)前四百年代の呉王宮殿の露、荆棘(けい)きよく荒れた状態にうつり、暴秦すでに衰えて、咸陽宮(秦の宮殿)の煙、睥睨(へいげい)にらみを利かすを隠しけんもかくやと覚えて哀れなり」と言う「和漢朗詠集」にある古代中国の歴史を思わせる状態になつてしまった。

平家の場合は函谷二嶂(ふんこくじょう)険しい山で守備を固めたけれども北方の敵(木曾義仲軍)の為に破られて、今は洪河涇渭(こうがけい)大きな川、此の場合宇治川・瀬田川の深さを守備の頼みとしながら東国の源氏軍に突破された。是を誰が予想したであろうか。その結果として文化都市でも有つた京都を追い立てられるように、泣く泣く知らない土地に身を寄せることになつてしまった。例えれば昨日は雲の上に居て地上に雨を降らす龍であつたのが、今日は市場の店頭に並ぶ干物のような情けない状態になつたようなものである。龍の干物は焼いても食えない。

「禍福道を同じくして盛衰、掌(たな)ころし手を返す」と言うが、それを表わす平家の衰亡が今、目前に在る。是を悲しまない者が居ない。保元の昔は春の花と栄えたが、寿永の今は秋の紅葉となつて散り落ちてゆく。

当時は諸国の武士が平家の統制下に「大番役」として交代で宮廷などの警護に就かされていたのだが、さる治承四年七月、その役で上京した畠山庄司重能、小山田別当有重、宇都宮左衛門朝綱の三名は理不尽な話だが「東国の武士」という理由だけで身柄を拘束されていた。その頃に源頼朝が平家打倒の兵を挙げたからである。程なく首を斬

られる予定であつたが、新中納言知盛が「平家の運が尽きたならば、彼ら（東国の武士）を百人、千人斬つたところで勢力を挽回することは難しいでしょう。彼らも故郷に妻子・家臣らを残しているの

で、其の者たちの嘆きを思うと気の毒でなりません。もし平家の運が開けて再び都に戻るようになれば（助命した者は）深く感謝するでしょう。此処は理を曲げて国に返して下さい」と申し入れた。其処まで言われると、平宗盛も尤もだと思ひ、三名を関東に返すことにした。

助けられた三名は頭を地に着けて感謝し涙ながらに「去る治承の頃から今まで、拘束されていて斬られるべき身を助けて頂きました。この後は何処までも平家に従います。どうか西国まで供をさせて下さい」と申し入れたけれども平宗盛は「其の方たちの魂は既に東国に帰っているのに、抜け殻だけを西国に連れては行け無い！」と断つた。

此の三名は平家に仕えて二十余年、万感の思いで涙ながらに別れを告げたのである。現代ならば、会社が倒産して従業員が他の会社に就職するのは当然のこととして受け取られるが武士の社会では小難しい倫理に束縛されていて、主人を変えることが大変だったのであろう。

### 忠教都落（ただのりのみやこおち）のこと

「忠教」を「忠度」にしている原本が多いようであるが、読みは「ただのり」である。平清盛の末弟で官は「薩摩守」であつた。他の平家一族に比して位階が低いのは庶出でもあるのか？武士としてよりは歌人として知られていたようで此の章段も、その話である。昭和時代でも世の中がノン

ビリとしていた頃には、乗り物の不正乗車で捕まる者を「薩摩守」と揶揄したが、それは平忠度（ただのり）（只乗り）に掛けている。良くも悪くも近代にまで知られた有名人ではある。

源氏に追われた平家一族が京都から集団逃亡をする時に薩摩守忠度も其れに従つたのであるが、途中から思い付くことが有つて都へ引き返した。従う武士が五騎と未成年の従者一人を伴つて都に戻り、二位・藤原俊成の宿所を訪れたのである。此の人は藤原北家（房前流）・御子左家（藤原道長の子・長家の系統）の出で、言わずと知れた歌壇の権威であり五条京極に邸宅が在つた。

物騒な時期であるから俊成の屋敷も門を堅く閉じていた。その門を叩いて「平忠度です」と名乗つた。それを聞いた屋敷の者は「平家の落ち人が帰つて来た！」と騒ぎ出した。忠度は馬から降りて声高らかに「特別な訳では有りませんが、三位殿（俊成）にお願いが有つて参りました。門は開かれずとも、どうか近くに寄つて下さい」と申し入れた。俊成が聞いて「やはり来られたか？其の方ならば、中に入れて差し支えない」と、門を開けさせ、忠度に会われた。此の二人の対面は緊迫した時期に似ず何となく趣のあるものであつた。

薩摩守が先ず「是までに和歌の道について教えを受けたことは、決して疎（おろそ）かに思うことは無かつたのですが、此の数年は京都近辺の騒動や諸国の争乱が平家に関わることで有つたために師の許にお伺いする機会を失つておりました。此の度、既に天子が都を出でられたからには平家一門の命運も尽きた、と思わねばなりません。

聞く所によれば、師のお力により和歌選集の編纂があるとのこと、願わくば生涯の名誉に其の中に一首なりとも私の歌を入れて頂こうと願つてお

りましたが、世の乱れによりその機会を失うことになりました。此の事が私の唯一の心残りです。いづれ、世の中が平穩に戻れば勅選の沙汰（天皇の命による和歌集の編纂）があることでしょう。此処に持参致しました巻物に私の歌を書き留めてあります。が、採録に値いするものが有れば御恩を頂きたく、それが叶えば草葉の陰にても嬉しく思い貴方様を遠いあの世からお護りする励みになります」と言つて、自分が普段から詠んで置いた和歌の中から選び出した百余首を記した巻物を鑑の隙間から取り出して俊成に差し出した。

俊成は是を受け取り、中を見てから「この様な忘れ形見をお預かりした上は、夢々（決して）粗略には致さぬことを誓います。それにしても（危険を冒して）是をお届けに来られたことは歌に対する深い思いがあることと（平家の境遇に同情を）しつゝそれがお気の毒に思えて感涙を抑え難く存じます」と答えたので、薩摩守忠度は喜んで、「今は（此の身が）西海の浪の底に沈んでも山野に朽ちても浮き世に思ひ残すことは有りません。それでは暇いとまを申します」と馬に乗り、兜の緒を締め、西を目指して行かれた。

俊成は忠度の姿が見え無くなるまで見送つてから、その場を離れたが忠度と思われる高らかな声で「前途程遠し、思いを雁山の夕べの雲に馳す」と口ずさむのが聞こえて耳に残り、俊成は名残惜しさに何時までも涙を抑えていた。

戦乱が収まつてから藤原俊成は「千載集（後白河法皇の命で編纂された和歌集）」を撰した時に平忠度が言い置いた言葉を思い出して是を哀れみ、採録する歌は多かつたけれども平家が反逆者として天皇の咎めを受けた立場なので、名前を表わさず「故郷花」と題して詠んだ次の一首を「読み人知らず作

者不詳」として歌集に入れた。

「ささなみや志賀の都は荒れにしを

昔ながらの山桜かな」

(平忠度が) 朝敵となった関係で仕方がないことではあるが、気の毒で不本意なことである。

### 経正都落(つねまさのみやおち)のこと

平家一門は京都に居られなくて一家一族が団体割引を利用し夜逃げをするのであるから一人一人の都落ちを書いていたので百科事典並みの膨大な記録になってしまう。平家物語の作者も途中から其れに気が付いて「一門都落」で締めくくると。

原本に依つては此の章段と次の「青山之沙汰」が一緒になっている。此の章段に出てくる平経正という人物は平清盛の次弟(経盛)の息子で、一般には殆ど知られて居ないと思われるのに「経正都落」で一項目を与えられたのは、仕えていた皇族が関わる話だからである。やはり世の中は「偉い人」に付いていないと後世に名は残せない。

修理大夫(しゅりのだいぶ)かつての建設大臣に相当する経盛の子で皇后宮亮(こうこうのうけ)宮内序次官の平経正は幼少の頃に、仁和寺の御室(にんなじのみむろ)京都・右京区にある真言宗の寺、歴代の皇族が法親王に任じられて御筆と称した)で学問を学んだ。今回の平家没落騒動で京都を去るに当たっても、名残惜しさに騎馬の家臣五、六騎を連れて仁和寺に行き、門前に立って申し入れた。

「平家一門は運が尽きて今日、既に帝都を去ることになりました。此の世に思い残すことは有りませんが、只々、法親王様との御名残りが尽きません。八歳の時に此処に参り、十三歳で元服を致

すまで、病氣以外には少しの間も御前を去ることも無く此処で過ごさせて頂きました。今日からは西海千里の浪の上に赴きますが、何れの日にか此の都に立ち返ることが出来ますかどうか分らぬことが悔しく思われます。今一度、法親王様のお姿を拝したくは存じますが既に鎧兜を身に着け、弓矢を持ち武装を致しておりますので、それを憚り(はばかり)ます」と言えば、法親王は哀れに思われて「其の姿でも構わぬ。此処へ参れ」と仰せられたのである。

其の日の経正は紫色の錦の直垂に萌黄色を染め分けた鎧を着て、鞆の部分を金具で飾った太刀を帯び、班文の有る矢を背に負い、黒地に白の籐蔓(とうづる)を巻いた弓を脇に挟み、兜を脱いで御室の第(皇子)が出てきて、邪魔な簾(すだれ)を上げさせて「近くへ」と言われた。

経正は供の藤兵衛尉有教に命じて持参した琵琶を取り寄せ赤地錦の袋から出して御前に置いた。

「是は先年(私に)下された琵琶・青山でございませ。私は都を去りますので此処に持参を致しました。手放すのは残念ですが戦場の塵(ちり)とするには勿体ないのでお預かり下さい。もし、私の運が開けて再び都に戻る日が来ましたならば、其の時は改めて頂戴を致します」と涙ながらに申し上げたので、法親王も其の志を憐れみ、

「飽かずして別るる君が名残をば  
後の形見に包みてぞ置く」

と書かれたものを下された。経正は硯箱(すずりばこ)をお借りして次の様にしたためた。

「くれ竹の笥(かきい)の水は変われども  
なほ住み飽かぬ宮の中(うち)かな」  
やがてお暇(いとま)を申し出ると、法親王に仕え

る年若い者から近従の僧、在家の僧、警護の僧に至るまで多くの者が経正を囲んで別れを惜しみ涙を流していた。その中で経正が法親王に仕えた頃に、同じ様な立場で居た大納言法印行慶と言う高僧は藤原民部卿頭頼の子であったが、余りの名残惜しさに桂川の近くまで見送ってくれた。

何時までも一緒、と言う訳にもいかないので其処で別れる時に涙ながらに感慨を込めて詠んだ。

「哀れなり老木(おいぎ) 若木も山桜  
遅れ先立ち花は残らじ」

是に対して経正は次のように返歌をした。

「旅ごろも夜な夜な袖をかたしきて  
思えば我は遠く行きなん」

それから巻いてあった(平家の)赤旗をサツと差し上げた。それとなく経正の周囲に控えていた兵たちが「それ!」と馳せ集まり百騎程になった一団は馬足を速めて間もなく行幸に追い付いた。

インフルエンザが猛威を振るっています。ワクチン注射を早々としたのに、違う種類のインフルエンザにかかってしまったとボヤク人も多い。今年、A型、B型が同時に流行しているようです。くれぐれもご用心ください。罹ったら、人に移さぬように十分な休みを取られますように。

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

# ふるさと風の会会員募集中!

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：

勉強会を行っております。○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）※入会に関するお問い合わせは  
白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

## ふるさと風の文庫

会報「ふるさと風」に掲載してきたものを、文庫本に編集し、石岡市まちかど情報センター、いしおか育ち他で販売しております。お問い合わせは編集事務局へ。



### ふるさと風の文庫の主な作品

- ・打田 昇三…打田昇三全集（全6巻）、  
歴史の嘘、私本平家物語、  
私本将門記他
- ・兼平智恵子…歴史のさといしおか散歩、  
ふるさと風のことば他
- ・伊東 弓子…風の景他
- ・小林 幸枝…風に舞う他
- ・菅原 茂美…遙かなる旅路（1、2）
- ・木村 進 …地域に埋もれた歴史シリーズ  
（全24巻）  
石岡地方のふるさと昔話、  
茨城のちょっと面白い昔話他
- ・白井 啓治…皇帝ペンギンの首飾り、  
霞ヶ浦の紅い鯨、  
朗読/ふるさと物語…他

## ふるさと風劇団「ことば座」団員&朗読教室生募集

### 劇団員の募集

ことば座は、霞ヶ浦を中心とした「ふる里物語」を朗読手話舞と朗読劇に表現する劇団です。ことば座では、スタッフ部門・俳優部門の団員を募集しています。

ふる里劇団に興味をお持ちの方の連絡をお待ちしています。

### 朗読教室生の募集

朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)心を演じることを言います。何かで自分表現をしたいと考えておられる方、朗読による自分表現を考えてみませんか。演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読で自分表現を、また朗読で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。月1回コース(受講料:¥6,000円) 2回コース(受講料:¥9,000円)

ふるさと風の会編集事務局

〒315-0001 茨城県石岡市石岡 13979-2 TEL 080-3125-1307